

復帰するのは難しいと考え、子どもの本を書いていくことに決めたと、いろいろな本に書いてあります。子どもの本の作家がそんなに稼げる仕事とも思いませんが、どうして子どもの本を書いて生きていこうと思われたんですか。

**内田** 一月に入院してね、二か月病院にいました。ずっと看板職人をしてきたから、ほかに生きるすべがないんです。だけど、現代詩を書いていたから、書けるんじゃないかなあとと思って。だから、児童文学にはいっさいつながりがないんです。渋谷で看板の仕事をしていた時に、そういう子どもの本屋さんがあったなあと出してね、ベッドで寝ている時に奥さんに、あそこに行つて子どもの本の雑誌を買つてきてと言つたのね。そうしたら、たまたま買つてきてくれたのが児童文学者の経済学に関する特集でね。



ふわとろ穴子鮭 ¥980  
●おさかな処 築地 奈可嶋  
エキュート立川店

今でも覚えています。まだ、自分の作品が活字にもなっていないのに、わたしにとっては児童文学が何かということよりも、児童文学の経済が大事でしたから(笑)。

—— しかし、なんのつてもないなかで、どうやって作品を発表していかれたんですか。

**内田** 童話を書いて、いろんな出版社に送つてね。でも、いくら送つても返事が来ない。それである時、想像したんですよ。世の中には、わたしのように童話作家になりたい人が山といて、その人たちがみんな原稿を送ってくる。これは、作戦を変えよう。それで、いろいろ知恵をしばつてね。出版社が出している小冊子のようなものがあるでしょ。そこに「わたしが作った本」みたいな特集があつてね。わたしの好きなちよつと変わった本を出している編集者を調べて、その人あてに送るようにしたんです。

—— その作戦がうまくいった?

**内田** いいえ。でも、童心社の千々松勲さんという、長さん(長新太さん)の絵本を出していた編集者から呼ばれたの。でもね、会いに行ったら、この作品は、残念ながらうちでは出せませんって。だけど、おもしろい作品だから、偕成社をあたってごらんつて言つて、その場で偕成社までの地図を描いてくれるわけ。

—— それで、偕成社で本になったんですか?

**内田** 結局、だめでしたね。でも、何年かして、「さかさ